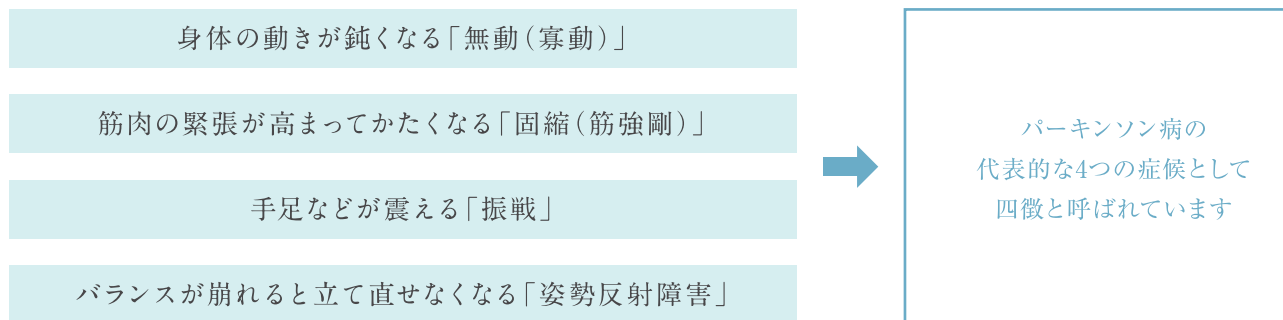


◆パーキンソン病について

パーキンソン病は、脳の中にある中脳黒質という部分にあるドパミン神経細胞が減少してしまうことによって起こる病気とされています。中脳黒質のドパミン神経細胞は、運動の調節に重要な神経系の一部を担っているためパーキンソン病では主に身体を動かすことに支障を来す「運動症状」がみられます。

具体的な症状



パーキンソン病は、このような症候の存在を確認することで診断され、またその分布や程度によって重症度が判定されます。さらに最近では、下記の「運動症状」のような特徴的な症状や、「非運動症状」のように多岐にわたる症状も話題となっています。

運動症状

- 顔の表情が乏しくなる「仮面様顔貌」
- 声小さく話し方に抑揚がなくなる「小声単調言語」
- 字が小さくなる「小字症」
- 前屈みになってしまう「前傾姿勢」
- 歩行時の歩幅が小さくなる「小さざみ歩行」
- 特に狭いところ等で足が前に出なくなる「すくみ足」

非運動症状

- においがわかりにくくなる嗅覚障害
- 睡眠中に夢の内容にあわせて大声を出したり身体を激しく動かすレム睡眠行動異常症などの睡眠障害
- うつや不安などの気分障害
- 便秘
- 起立性低血圧
- 腰痛をはじめとするいろいろな痛み

このような症状は、患者さんもパーキンソン病には無関係と考えて見過ごされることも多いのですが、それらの症状の原因となり得る身体の部位にパーキンソン病の病理学的変化が見られることがわかってきており、パーキンソン病は脳だけではなく全身性の疾患であると考えられるようになってきました。

またこれらの症状は、パーキンソン病の発症前から出てくることがわかってきており、将来的にはパーキンソン病の早期診断に役立つことが期待されています。

パーキンソン病ではこのように非常にたくさんの症状が出てくる可能性があるのですが、必ずしも患者さん全員にすべての症状が出てくるわけではありません。そのため必要以上に心配しなくても良いのですが、何か気になる症状があるときにはパーキンソン病と関係があるのかどうか、当院までご相談ください。

お問い合わせ・ご相談

札幌パーキンソンMS神経内科クリニック 地域医療連携室

TEL.011-700-5859 (直通)

受付時間: 月～金曜日 午前9時～午後4時 (祝日・年末年始を除く)

パーキンソン病の治療について

1. 薬物療法

前に述べたように、パーキンソン病ではドパミン神経細胞が減少しており、神経伝達物質であるドパミンが不足した状態になっています。そのため、薬物治療としては不足しているドパミンを補充することが最も理にかなっていると考えられます。

その点で、レボドパは身体の中でドパミンに変換される物質ですので、レボドパ製剤がパーキンソン病の薬物療法も最も基本的な薬剤と言えます。パーキンソン病治療薬にはレボドパ製剤の他、レボドパ類似の働きをするドパミン受容体刺激薬、レボドパ製剤の効き目を増強する働きをするMAO-B阻害薬やCOMT阻害薬、さらにドパミン系以外に作用してパーキンソン病の症状を改善する薬剤など、非常に多くの種類があり、患者さんの年齢や症状、社会的状況などから総合的に判断して、最も適した薬剤を選択して治療を行います。

そのためパーキンソン病の患者さんが使用している薬剤は通常一人一人異なることになるわけですが、当クリニックでは患者さんとよく相談しながら、常にその患者さんにとって最適な治療を目指していきたいと考えています。

2. 外科治療

脳深部刺激療法という治療が現在主に行われています。この治療は、脳の奥にある神経核に電極を挿入し、胸のあたりに埋め込んだ心臓のペースメーカーのような機械から電気刺激を行って、パーキンソン病の症状を改善するというものです。通常は薬物治療を十分におこなっても症状のコントロールが難しい患者さんに施行を検討します。

3. 非薬物療法

(リハビリテーション等)

パーキンソン病のリハビリテーションは、薬物療法と両輪をなすと考えられるほど、パーキンソン病の治療においては重要なものと言えます。最近の話題としては、太極拳やアルゼンチンタンゴがパーキンソン病の症状を改善したという報告がなされていることが挙げられますが、リハビリを楽しく継続出来ることが最も重要と考えられます。その点、当院は通いやすい立地で、開放的なリハビリスペースのなかで最新の機器を用いたリハビリを行えますので、外来でリハビリを継続したい患者さんには最適な環境ではないかと考えています。